
この街の片隅で

月野優

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

この街の片隅で

【Nコード】

N7169X

【作者名】

月野優

【あらすじ】

中学を入学した不良少年の月野浩美は、入学早々問題ばかり起こしていた。

入学一週間にして先輩にも目を付けられた彼は先輩と喧嘩した日の帰り河川敷で美少女と出会ってしまう。

ある街の片隅で、不良少年と美少女とその仲間達が繰り広げる青春のストーリー。

学生への嫌がらせ、としか思えないほど山の上に設立した学校に入学した俺は学校手前の急勾配な坂を、春だというのに汗をかきながら律儀に登校している最中だった。

時間を確かめる為に取り出した携帯のディスプレイにはでかかとPM12:30と表示されている。

完全に遅刻だ。

遅刻はもちろん、あらゆる問題を起こしている俺は入学一週間にして既にアウトロー状態になっていた。

ようやく坂を登り終えたと思えばまた階段がある。なんなんだ、この学校は……少林寺じゃあるまいし、生徒を三年間で下半身筋肉バカにしようとしてるんじゃないな。

すっかりやる気が削がれてしまい階段に座り込みブレザーの胸ポケットに忍ばせた煙草に火を付けた。

（あー、だつりー……）

「こんの　大バカもんがー！！遅刻しているにも関わらず、学外で煙草を吸っているとは貴様何事か！」

近隣住民からお宅の学校の生徒が煙草を吸っています、なんて学校に通報があり、すぐさま駆け付けた先生達に捕まった俺は生活指導の西山先生と女性担任の柊先生に生徒指導室で説教をくらっていた。「しかもなんだ、その髪と耳は！チャラチャラしよって。学校を舐めとるのが貴様は！！！」

この野郎、黙って聞いてりや良い気になりやがって。次になんか言ったらぶん殴つてやろう。

「まあまあ西山先生。彼も反省してますし今日はこのへんで。ね？」

さすがは担任の先生だ。反省はしてないがよくわかってるじゃないか。

「柊先生は甘過ぎます！だいたいそんなことだから生徒にも舐められてですね」

「西山先生、ちょっとストロップ！生徒の前でそんな話は」

「あつ、これは失礼　うおっほん。月野、貴様今度何かしてみろ。次はただじゃおかんぞ！肝に命じておけ！！！」

ピシャン！西山先生は勢いよく扉を閉めて生徒指導室から出ていった。

「月野君、入学して一週間たつけど遅刻とか多いよね？なにか困った事でもあるのかな？先生達は勉強を教えるのも仕事だけど、生徒の悩みも解決するのも先生なんだよ。だから…ね？」

ちつ、近い……見た目より幼く見える柊先生はずいつと顔を近付けた。制服を着たら下手すりや同じ年には見えるかもしれない。

しかし、すげー良い香りがする。っていかんいかん、相手は子供の敵だ。ここはクールに……

「別に…なんもねーよ。それより早く帰りたいんだけど」

「あつそうね！それじゃ六時限はちゃんと受けてね」

それを無視して生徒指導室から出ていった。

子供の敵ねえ……教室に帰る途中、知らずに呟いていた。

別に先生が嫌いな訳ではない。

そりゃあ良い先生だっているのはわかっている。ただ…理不尽な大人達が嫌いなんだ。身勝手な大人のせいで子供は辛い思いをするんだ。

さすがに六時限はちゃんと受けて今は放課後。

「ヒ口、お前また西山に怒られたらしいな！今度はなにしたんだ？」
俺は小学校五年生になってこの街に引っ越してきた時からずっと一

緒にいる幼馴染の大河原と下校の為に靴を履き替えるべく靴箱で先程の事件をネタに話していた。

どうでもいいが、幼馴染とは美少女がデフォルトだったと思っていたが間違いらしい。

しかし、大河原はたまに押し倒したくなるような女のような可愛い顔をした今話題の『男の娘』なのである。まあ本人には言わないが

……

「まあな、今日はついてねーよ」

「ひひっ、でもお前らしーよ。その間抜けさが」

無邪気に大河原は笑った。ってか、それが幼馴染に言う台詞かよ。

ちよっとは情をかけてくれてもいいじゃないか！

「あっ、わりー。教室に携帯忘れてきた。待っててくんね？」

大河原は急に立ち止まり、Uターンして駆けていく。

「早くしろよ。間抜け」

「うつせー！後で覚えとけよ！」

騒がしい奴もいなくなってる事もないので携帯をいじくっていたら急に自分の周辺だけ暗くなったのに気付く。

顔を上げると180？はあるう、大男の二人組がいた。

制服を着ているので生徒なのは間違いない。

うちの学校は上靴の色が学年によって色が違う。赤は一年、黄色は

二年、緑は三年だ。この二人は黄色だから二年か。

「お前、今年入学した月野浩美か？」

「はい、そうですがなんかようすか？」

先輩ということで無難に敬語を使った。敬語を使われたから良い気になったのかだんだんとエスカレートしていく。

「お前さあ、入学一週間で色々やってるらしいけどあんまり調子乗ってんじゃねーぞ？」

「すいません、別に調子乗ってる訳じゃないんで。用がすんだなら早くお帰りになれ。ってか早く消えるバカ」

いかん、ボ口が出てきた。敬語って難しいね。やべっ、先輩AとB

の顔がだんだん赤くなってきた。

「後輩相手に背丈だけで先輩風ふかしてんじゃねーよ。お前らみたいなのが一番腹立つんだよ！お前ら二人共片腕で勝てるわ」

「てめー、人が手出さないと思って調子乗ってんじゃねーぞ！ちょっと面借せや！ー！」

先輩AとBは沸騰したヤカンのように怒っている。沸点低いな、こいつら。

入学一週間にして先輩と喧嘩。うん、後には引けないな。今日は本当についてない……

「いてて、あいつらマジで手加減しろつーの。二人掛かりは反則だ」ブレザーを肩に担ぎ、殴られて血だらけの顔が後になり痛くなったのを我慢しながら下校していた。

喧嘩はというと……当然負けた。漫画やドラマじゃあるまいし一対二は一人は負けるのは当然だ。

しかも180？もある奴が二人だ。

大河原はとづくに帰ったろうな。多分すげー怒ってる。明日、学校でプロレス技をかけられる。

一つ大きな溜息を吐いて、夕日であかね色に染まる道をとぼとぼ家へ向かって歩いた。

辺りはすっかり暗くなり通学路の途中にある河川敷にさしかかった時、川に向かってぼつーと立し尽くしている同い年くらいの女の子がいた。

最初は不信に思ったが、何故だか彼女に吸い寄せられているように近付いていき気が付くと俺は女の子に話かけていた。

「お前、なにしてんの？」

彼女が振り返ると、それはもう相当な美少女だった。

腰まであろう艶やかな黒い髪に、キラキラと輝く宝石のような大きな瞳、誰もが魅了する魅力的な小さな唇。俺は見惚れて言葉が出なかった。

天使が舞い降りた！そう思った。

「え？なんかよう？うわっ、なにその顔！キモッ」

前言撤回。悪魔が降臨している。第一声がそれだったのだから最悪だ。

「喧嘩でもしたの？しかもその顔からして負けたのね。情けない…私、不良って大っ嫌いなだよ」

「あーそうかい、邪魔したな。じゃーなブス」

そう言っていると俺は家へ帰ろうとした。

「待ちなさい！あっあ…あんた今、私にブスって言ったわね？…」
彼女を見ると俯き体をプルプル震わせている。

「私はね！不良とカボチャとブスって言われるのが大大大っ嫌いなよ！このヘタレヤンキー、バカアホ死ね」

カチン。流石に頭にきて三十分は口喧嘩をしていたが、女は口喧嘩は強いってのは本当だった。

相手はありとあらゆる言葉で罵ってくるのに対し、こっちはだんだん言う事もワンパターンになり私の勝ちね、なんて言い残し去って行った。

一人取り残された俺は大きく溜息をせとぼとぼ家へ帰った。今日は本当についてない……

疲れた。早く帰って寝よう。

学校が家へ今日の報告をしていたらしく顔が血だらけの俺は家へ帰ると説教されたのは言うまでもない。

「痛い…痛い、痛い、いつてーな！ギブ！ギブアップだ、離しやがれ」

「いいや、離さないね。昨日俺はどれだけ惨めで寂しい思いをしたかわかってんのか？」

昨日このアホは俺が放って帰ったと勘違いしているらしく、やっぱりプロレス技をかけられた。どうでもいいが、こいつは何故に女みたいな香りがするんだ。ほんとどうでもいいけど。

「昨日俺はお前をどれだけ心配して探したか…ゴミ箱、女子トイレ、女子更衣室、その他もろもろお前が行きそうな所は全部探したぞ！」
「ちよつと待て。お前俺をなんだと思っただよ」

人を変態扱いしやがつて。しかも、学校の前の公園で喧嘩してたのにそこまで探すならここまで見にこいよ。普通は学校の前に公園があるなら一番最初に行くと思んだか……

「まあそんな事はどうでもいい」

「よくねえ」

「その顔どうした？昨日なんかあったのか？」

スルーすんじゃねえ！とか、話の順番逆だろーが！とか、ツツコミたいところは多々あるが、まあいいや。

「まあ…喧嘩した」

「ちつ…で、どの誰よ？相手何人だ？勝ったのか負けたのか？」

「いつきに聞くな。相手はうちの二年の二人組だ。それから…負けたよ」

「…んだよ、ちくしょう！なんで俺に言わなかったんだよ！」

大河原は頭にきたらしく険しい顔をしていた。ってかその間、女子トイレとかにいたの覚えてないの？

「俺の問題だからほっとけ。それより昨日の帰りに河川敷にすげー可愛い子がいてさ。見た目はすげー可愛いけど性格がもうすげー悪

いのよ。それで河川敷で口喧嘩なつてな。昨日はほんといつてねーよ」

しかし、黙っていたら本当に可愛かった。

名前とか携帯番号教えてもらわなかったのは少し惜しい気もする。

「お前、喧嘩の後は女ネタかよ。その上、初対面の女と痴話喧嘩とは、アホ通り越してやつぱりアホだな。で、どんな子だった？」

「うるせー。そうだな…まあ容姿はマジで可愛かったな。例えば…あれ。あの今こつちに歩いて来てる子みたいに黒くて長い髪に大きな目で小さいが決して子供地味で無い唇…って、ああああああああああ！！！」

「ヒ口、どうした？パンツでも見えたか？」

昨日の内面夜叉女だ。まさか同じ学校だったとは思ってもみななかったので腰を抜かすぐらい驚いていたら、あろう事か夜叉女が喋りかけてきた。

「ん？あんた昨日のヘタレヤンキーじゃない。一緒に学校だったとは奇遇ね」

奇遇ね、じゃない最悪だ。赤い上靴だから同い年かよ。

「名前も聞いてなかったし、ちようどいいわ。ちよつと来なさい」

「は？なんで俺が」

「い、い、か、ら、来なさいクズ！」

ネクタイを掴んでぐいぐい引つ張り連行される最中、大河原の顔を見たらきよとした間抜けな顔をしていた。助けるよ……

例の夜叉女に連行された先は屋上へ続く扉の前。

この学校は屋上を閉鎖している。まあ今の時代、当たり前の事なんだがちよつと残念な気もする。

夜叉女にまたネクタイをぐいっと掴まれた。これどう見ても力ツアゲの現場じゃね？

「私は不良が大っ嫌いな」

「そんなの昨日いつてたろーが」

「そう、だから同じ学校の生徒として見過ごす訳にはいかないわ」

「俺がなにしようとお前には関係ない」

「いいえ、関係あるわ。私はこの学年委員長だからよ。つまり、一年生の代表。あなたみたいな自分勝手に人の迷惑も考えないアホでバカで頭の悪い不良がいると私達一年生みんなに迷惑がかかるの。もしかしたら真似する子もいるかもしれない。その前にあなたをまづ更生させて二次災害を防ぐって戦法よ」

「……俺が不良って根拠はあるのか？まだなにもやってねーぞ」

「そんなの昨日の事と今のあなたの身だしなみを見れば一目瞭然じやない。髪の色もピアスも校則違反でしょ？それだけで充分よ」

くっ、反論できない。しかし、更生させます、はいわかりました、で素直に聞けるほど人間できてないんだよ俺は。

「あなたみたいなクズでも真面目に私と先生の言う事聞いてたらちよつとはましにはなるわ。それとも煙草吸って暴力してるのがっこいいとか思ってるんなら大間違いよ。どうせドラマや漫画でも見て影響されたんでしょう？そもそもそんなヘタレじゃ不良になんか向かないわ」

「うるせーんだよ！！お前に俺の何がわかるってんだ？ああ？」
人の事を知った様な風な態度に頭がきて、つい大声をあげてしまった。廊下が反響して声が響き渡った。

「俺は不良に憧れてる訳でも不良でもない。知った様な事言うな。理不尽な大人達の言う事に振り回された俺達子供が辛い思いをする事が気に食わないだけだ」

自分でもなにが言いたいかわからない。

それだとただの勘違い反抗期バカだ。

自分の思った真実を言ったのに…どうせまた罵られるだけだ。言わなきゃよかった。

彼女は一瞬なにが起きたかわからないといった感じできょとんとし

ていた。それから我に返り、気まずい雰囲気を変えようと、こほんと咳払いし先ほどの人を見下したバカにしたような顔とは打って変わり、いきなり真面目な顔になった。

「いい？よく聞きなさい。私はあなたを学年委員長として更生させてみせるわ。何日、何ヶ月、何年かかろうと必ずさせてみせる。そしてあなたを絶対に見捨てたりしないわ絶対に……私は日向翔子。絶対に更生させるわ」

その美しい宝石のような瞳は真っ直ぐと俺の目を見ていた。

一人の人間として、対等な人間として見ているような。

「とっ、とにかく俺は不良でもなんでもない。更生とか言われようと全くもって意味がない。もうほっといてくれ……怒鳴って悪かったな、じゃあな」

階段を下りる最中、後ろから日向の声が聞こえたがあえて無視して大河原の元へ帰った。

それが日向翔子との二回目の出会いだった。

帰ってからは最悪だった。

帰ってからずっと「なにがあった？」と大河原に何度も問いたただされ、やたらしつこいので怒鳴ったら喧嘩になり先生には顔が怪我していただけで呼び出しをくらい、放課後まで説教。

やれやれ今日もついてない。

帰りはやっぱり大河原の姿は無く、しぶしぶ教室（鞆は持って来てませんでした。てへっ）には向かわず靴箱に直行する。

しかし、こういう日は不幸が続く。

二度あることは三度ある。

靴箱には昨日の先輩二人組＋なんかボス的な感じの奴がいた。

「おい、今日も一人で下校か？あつ、もしかして虐められてるのか？可哀想に。先輩達が可愛がってやるよ」

これだから中坊は（まあ俺もだが）。

高校生までなるとまだ考えが大人になりつつあるから、一度のささいな喧嘩でわざわざ仕返しなどということもない（まあでも、やられたらやり返す、また逆もしかりなので相手が負けを認めない限り高校生でもエンドレスな喧嘩もあるけどな）。

しかし、中学は頭がまだガキなので質が悪い。

負けたらもちろんだか、勝っても負けた相手の事を『また殴れる良いサンドバック』と思うバカがたまにいる。

「今日はマジで勘弁してくれ。ほんと疲れてるから」

「ああ？口の利き方がなつてねーな。それとも聞き間違えたのかな？パードウン？」

カチン。あー今ほんと頭にきた。

頭にきたので思いつき一人の先輩の腹に蹴りをした。

思いのほか、良い所に入ったらしくゲロ吐いて地べたで悶え苦しんでいた。うわあ、ばつちー。

「てめえ、あんまり調子乗ってつと昨日みたいにボコボコにすんぞコラー！！」

突然の出来事に啞然とした先輩達は我に振り返りかかってきた。

「はーはつはつは！そこまでだ」

なに！？新手か？これ以上、人数が増えるとキツイぞ。

そこには……サングラスをかけて頭に体操服のスポンをかぶった変質者がいた。

先輩も殴るのを止めて啞然と変質者を見ている。

「俺の名は大河原ハーマイオニー。悪さをする悪党は俺が『ウインガーディウムレディおっさん』で退治してくれる！ん？あれ？なんでみんなそんな目すんの？」

「……大河原なに……やってんの？」

アホだ。アホがいる。

「え？ヒ口、なんでわかったの？お前……まさか！魔法使えるのか？」
思いつき頭を殴った。今ので頭の病気が治ってくれるのを願おう。

「いってー、なにすんだ！」

「なにすんだ、じゃねえ！空気読めよ！この変態KY野郎！」

先輩達もあまりのアホさに戦意喪失して大河原をジト目で見ていた。
「変態とはなんだ。せつかくこのサングラスと体操スポン借りてきてまで助けに来てやったのに」

サングラスはとにかく体操スポンも借り物かよ。本当にアホだな……

「で、どこから借りてきた？そんなもん」

「サングラスは技術授業の先生の福田だ」

ああ、あのヤクザみたいな先生か。

「体操スポンは女子更衣室だ」

「お前、やつぱり変態だ！人の事を散々変態扱いしといて、結局自分が一番変態じゃねーか」

「うっせー！顔隠さないと後々面倒だろーが。お前が喧嘩売られてんの見つけて急いで探したら女子更衣室しかなかったんだよ！」

バカだ。バカの最強がここにいる。

「おい、ちよつといいか？」

「ああ？今それどころじゃないんだ。変質者がいるから後にしてくれ」

振り向くと頬を思いつきり拳が当たった。

「お前ら二人のバカさ加減は充分わかった。じゃあ、バカな後輩達にお仕置きの時間だな」

「上等じゃボケ！」

入学して一週間と一日。二回目の先輩との喧嘩になった。

「いってー。マジであの筋肉ゴリラはやばかった。まだ足がガクガクすんぞ」

「ああ、なんとか勝ったけどな」

すっかり夕日で染まった道を今度は二人で肩を担ぎながら下校した。

「それでお前、サングラスと体操スボンどうした？」

「ん？ああ、あれか？サングラスは割れたから捨てた」

「お前、福田にぜってー殺されんぞ……」

奴は確実に過去に黒歴史を待つ存在だ。大河原、明日死んだな……

「で、体操スボンは？」

「ああ、あるよ？ほら！血だらけになったから捨てようと思ったんだけどよ、流石に可哀想だから洗って帰すわ」

鞆からばさつと取り出した体操スボンは血だらけで左上の名前には

『日向翔子』と書かれていた。

あつ、こいつ明日確実に死んだな、と思った。

「大河原よ、お前は良い奴だった。あばよっ！」

「え？なにに？照れるじゃんよー。でもなんで過去形？」

別れ際に言っただぶんこれが彼の最後の言葉だったような気がする。

次の日、やっぱり大河原は福田に呼び出しされ真っ青な顔で帰ってきた。

「ヒロ、あいつは怒らせんなよ。ぜってーだ」

大人の階段登ったな大河原。

その後に全校集会が開かれ『女子更衣室窃盗事件』が発表されたのは言うまでもないだろう。その時、日向が俺達をガン見していた時はマジでビビったが。

全ての授業が終わり今は放課後。

流石に先輩達も昨日ボコボコにされてこりたのか靴箱にはいなかった。だが、新たな問題が起きた。

「おい、いい加減にしてくれねーかなマジで」

さつきから日向が後をつけてくるのだ。

「あら奇遇ね、私も今帰りなのよ」

「お前、今日一日中つけてたの知ってんぞ。休み時間、昼飯も、トイレ行く時もだ」

「あら偶然ね、私もたぶんそこに用事があつたのよ」

「嘘つけ！あーもういいや。なんか無駄な抵抗な気がする」

不毛な口論もする気もないので素早く靴を履き替え下校する事にした。

これはたぶん俺が何かしないか監視してるに違いない。

ここで問題を起こせば相手の思うつぼだ。今日は運も良い事に先輩にも絡まれず、アホの大河原もいない。これはチャンスだ。

ここでもなにも起きなければ普通の学生だと思ってくれるだろう。そうしたら奴は俺をターゲットから外し大河原とかに移し替えるだろう。

完璧だ。俺なら出来る。落ち着け浩美、ここは戦場だ。クールになれ！

「俺は真面目で優等生だから真っ直ぐ家に帰って勉強でもしようかな！」

わざとらしくらい大声で独り言を言う。うしっ、良い感じだ。てくてく家へ帰る最中、やっぱりついて来ている。

すぐ視線を感じるのど時たま不意打ちで振り返ると相手も目を逸らし鼻歌なんて歌ってやがる。こいつ演技へたっぴだな…

こいつはこういう焦れたい作業は苦手なんだろう。

真っ正面からぶち当たるようなタイプだもんな。でも、もうちょっとまじな回避方法あるだろ。

それから帰り道で色々、真面目アピールをした。

信号を渡る婆さんの手伝い、捨て猫に餌をやる（場合によっては悪い事と思われるから気をつけて）、落し物を交番へ届けるなど色々して疲れた。下校ってこんなに疲れるもんだっけ？

それでも日向はずっとついて来ていた。ええい！しっこい。

「お前、いつまでついてくるつもりだ？」

「あら意外ね、私も」

「もうそれはいい」

話を途中で切られた日向は怪訝な顔をしていた。

「俺について来てもなんも起きないぞ」

「へえ、昨日は女子更衣室に忍び込んだくせに？」

「違う！俺じゃない。そもそもお前の体操スポンを盗んでなんの得がある」

「じゃあなんで私の体操スポンが盗まれたなんて知ってんのよ。全校集会ではただ女子更衣室で窃盗があったって話しかしてなかったわよ？変態」

ふふん、と勝ち誇ったような笑みをする日向。

ぐっ、かまかけられた。知恵比べと口喧嘩では勝てない。学年委員長というのだから頭が良いのは明確。こうなれば体力で勝負だ。

「あっ！力バが逆立ちしてる！

「え？どこ？」

「じゃあな学年代表さん！」

日向が逆立ちした力バを探している間に俺は全速力で走り出した。

「この嘘つき！しかも逆立ちした力バってバカじゃない、待ちなさい！」

ようやく嘘だとわかった日向の怒鳴り声を背中で聞きながら猛ダッシュで逃げる。

一応、体力には自信がある。相手は身体も小柄な女子中学生だ。振り切れない訳がない。

家はすぐそこだが、あえて遠回りする。

振り切れないまま家へ帰ると家を覚えられて逃げる意味がない。

ぐるっと町内を一周した所で立ち止まる。ぜえっ、キツイ。後ろも振り返らず全速力で久しぶりに走りかなり疲れた。煙草やめようかな……さすがに巻いただろ。

「あんた意外に足速いのね。振り切られるかと思ったわ」

ギョツとして、おそろおそろ振り返ると日向がいた。

頭も良いくせに運動も出来るのかこいつは。ってか普通ここまでやるか？

「あんたの家と名前を教えなさい。そしたら今日は勘弁してやるわ」

「いやだね」

「じゃああんたが帰るまで付いて行くわ」

この女マジでやりそうだから怖い。これじゃらちがあかん。

「名前だけだぞ…名前教えたら今日は帰れよ」

「いやよ、家も教えなさい。不良生徒の情報の把握は学年委員長としての義務だわ。だから教えろ」

仮にも俺は（自分で言うのもなんだが……）髪の毛を染め、耳にはピアスし、つい先日は先輩と喧嘩して皆から不良だのヤンキーだのと言われている奴だぞ。そんな男と二人でいるんだ、何かされてもおかしくない。それなのに、怖がるどころか真っ正面からタン力を切ってくる。

あんまりやりたくなかったが、ちよつとこの世間知らずをビビらす

か。

女の子が嫌がる事をするふりをする、そうすれば俺が危ない奴だと思っ
て自分から離れて行くだろう。ヤンキーの下っ端みたいな真似だからやり
たかねーけど、今後の為だ。

こいつだっけ人生に一回しかない青春を俺みたいな男の為に使いた
かねーだろ。

「お前あんまり良い気になっでんじゃねーぞ」

日向の手を強引に引っ張り近くの公園へ連れ行っただ。

「え？なに？いきなりなのになにすんのよ。離しなさいよ」

よしよし、ビビってる。なんだかノリノリになってきた。

公園に着いて引っ張っていた手を投げるように離すと日向は地面へぶ
つ倒れたが俺は逆にざまーみると思った。

最近のストレスがなにかの拍子にぶちんと切れたのか、なんだか演
技が演技で無くなっているような気もして自分が自分で無いような
気がした。

もちろん直接手を出している訳じゃないが地面に這い蹲る日向への
愚行はエスカレートしていった。

一時間はたつてゐるな。辺りも夕日で綺麗なあかね色に染まってる。

「はあはあ……おら立て」

腕を無理矢理引っ張り上げ、立たして顔を掴んで顔を見ると涙が頬
をつたっていた。こいつ泣いてたのか……罪悪感膨張するが、今
の俺はこいつが悪い、と思っで吹き飛ばした。

「学年代表がこんな様とは情けないよな？それとも俺に手を出され
るのを期待してたのか？だったらお望み通りにしてやるーか」

日向はギロリと大きな瞳で俺を睨んだ。

パアン！夕日で染まった公園に大きな音が響き渡った。

右の頬が熱い。じんわりと熱さが染み渡り、そこから痛さが広がる。
「いつ……てえ……」

俺は日向にぶたれたのか？痛みに頭が着いてこず……ただ混乱した。

「触らないで……ぐすつ、私に気安く触るな変態！私の事も知らないくせに悟ったみたいに言うなクズ！お前みたいなゴミが周りに迷惑をかけるんだ！死ぬ死ぬお前みたいなクズはこの世から消え失せろー！！！」

日向は俺を押し倒しそのまま走っていった。

何が起こったかわからなくて某然と彼女の後ろ姿を見ていた。

なにしてるんだろーな俺。女の子泣かせるなんて…クズと言われてもしかたない、最低だ。

でも、これであいつは明日から絡んではこないだろう。

いいんだこれで、間違った事はしたかもしれないが今後の為だ。

「誰に言い訳してんだか…」

立ち上がり尻についた土を払い落とし家に帰った。

「いいか、ヒロ。男は絶対に女の子を泣かしたら駄目だ、わかったな？」

「うん！わかった」

「お前は優しい子だ。身体が貧弱で病気もよくするけどな、それだけが強さじゃないんだ。優しい事はお前の強さ、男の強さなんだ。お父さんはヒロに強い男になってほしいんだ」

「僕、絶対に強くなる。泣いたりしないよ？お母さんやお姉ちゃんを僕は守るんだ」

「夢…か」

時計を見るとAM07:00と指していた。早起きしちまった…寝よ。

もう一度寝ようと布団に入ったが全然寝付けず、しぶしぶ制服に着替えて自分の部屋から一階へ下りるとキッチンからは朝の空腹で食欲をそそる香ばしい臭いがする。

「ヒロ、起きてたんだ。珍しい」

「うつせー。それより早く食わせろ」

姉貴が朝ご飯と二人分の弁当を作っていた。

「あんたねえ、それ人に頼む態度？」

姉貴は二つ上の中学三年生だ。ちなみに二つ下に妹もいる。この一軒家に兄妹三人で住んでいるのだ。贅沢なガキ共と思うかもしれないが放っておいてほしい。

姉貴は中学二年まで吹奏楽部をやっていたが俺達兄妹を心配して今はこうして家事を勤しんでいる。

昼から遅刻する日や行かない日もあるのに俺の分も毎日作っている。

「優は？」

「まだ寝てる。まったく誰に似たんだか…」

やれやれといった感じで妹を起こしに行った。

「じゃあ、俺先に行くぞ」

二人分の弁当を一つ手に取り家を飛び出した。

昨日の事が頭でモヤモヤする。あいつ泣いてたな……いや、あいつが悪いんだ…よな？

でも、これであいつに絡まる心配はない。

これが俺の望んだ結果だ、問題ない。

しかし、自己暗示をかけようと足取りが重い。

学校に行きたくない。学校で日向とすれ違う度に気まずい雰囲気になり、きつとあいつは俺を避けながら学園生活を送るんだろうな。

そんな事を考えてるうちに学校に着いてしまった。上靴に履き替え教室へと向かった。

「あら、不良で変態のくせに今日は早いじゃない」

教室で待ち受けていたのは日向だった。

何故彼女が俺の前にいるんだ。昨日された事を覚えてないのか。い

や、覚えてないはずがない、一生のトラウマまでとは言わんが心に傷が付いたのは確かだ。それなのにどうして？…まっ、まさか！こいつ…生粋のMか！？……な訳ないよな。

「……さっき『あいつは俺を避けながら学園生活を送るんだろうな』って言ったばかりなんすけど」

「知らないわよ。月野浩美、あなたの事は調べたわ。名前、クラス、出席番号、その他もろもろ…」

げっ、マジかよ。まあ普通に考えたら一緒の学校なんだし学校で調べた方が早いよな。

「ついでに住所も」

「ちよつと待て。住所は誰に聞いた？場合によっちゃ個人情報保護法違反にもなるぞ」

「大河原くんよ」

あのヤロー！後でしばく。

「家族構成、家族関係とかも不良を更生させるのに必ず必要になる情報だから大河原くんに聞いたけど、知りたかったら本人に聞け、ってこれだけは教えてくれなかったわ。まあプライバシーに関わるかしらね…って事で家ではどんな感じが詳しく述べよ」

「……プライバシーがどうのって言うてなかったか？」

「本人に聞けば問題無いわよ」

なんだその無茶苦茶な理由は。登校中、悩んでたのが馬鹿らしくなるほどムカついた。

「とにかく家の事情はプライバシーだ。話す意味も教える義理もない」

そこで日向は隠し持っていた切り札を出すような不適な笑みを浮かべた。

「私もこの二日でなにも学んで無い訳じゃないわ。あなたがそう言うって事すでに計算済み…私に教える義理が無い？ふふっ、ならば……私と付き合いなさい！！！」

地球、いや世界中の時間が止まったかと思ったね。実際、教室内は

凍りついていた。

「……………は？」

噂は瞬く間に学校中へと広がっていった。

それもそのはず、日向は才色兼備の美少女だけあって上級生からも人気があり、学内では知らない者もないほどの有名人だ。

かく言う俺も入学早々、問題ばかり起こしているので学内では有名人だった。

その不良少年に、成績優秀、スポーツ万能、才色兼備の一年代表の美少女が朝イチ教室で堂々と告白したのだから無理もない。

その日は学校中の男子生徒の視線が殺気だっていたのは言うまでもない…のか？

「ついてくんな」

「彼女なんだからいいじゃない」

今は授業が終わり、下校中の最中だった。

「あのな、俺は容認した覚えはない。しかも、学校中で悪評の俺の彼女なんかになればお前の体裁も危なくなるんじゃないのか？」

「それもそうね…じゃあ、友達って事で手を打つわ。友達なら家へ行ったらって不自然じゃないでしょ？」

「それもどうかと思うが…まあ友達か彼女なんてどうでもいい。でも昨日俺がした事を忘れた訳じゃないだろ？なんで懲りずについてくるんだ？」

そうだ、一番の問題はそこだ。

昨日、散々嫌な思いをしたのに何故懲りずに俺に構ってくるかだ。

まさか…本当に俺に気があるのか？

「あなたに本当に気がある訳じゃないわ」

だろーな。

「昨日の事も許さない。一生ね。でも私、最初に言っただじゃない？あなたを必ず更生させる、あなたを絶対に見捨てたりしないってね」
真っ直ぐ俺を見る瞳、揺るがない言葉に不覚にもくらくときてしまった。あぶねー、思わず惚れるとこだった。

「逆に質問するわ。なんでそんなに他人と壁を作りたがっているの？私はあなたが無理してまで学校中に自分の悪評を振り巻いて他人との距離をとっているようにしか見えない」

「そんなことねーよ。俺が好きな様に行動してたらこうなったただけだ」

「嘘ね、正直に言いなさい。昨日も無理して私に暴力を振るつたのはわかってるわ…家でなにかあるの？家庭に問題があるなら相談に乗るわよ」

気が付くと日向と出会った河川敷まで来ていた。

辺りは夕日で染まったあかね色でどこか寂しい雰囲気。

春なのにまだ肌寒い風が二人の間を通り抜けた。

「別に家庭の問題なんてない」

「そう」

俺の顔を見てから何か悟ったのか日向はそれ以上追求してこなかった。

俺の家まで二人無言で帰り、日向は俺が家に入るまでずっと見守るように玄関前で立っていた。

次の日からは日向も本格的に生徒会の仕事も始まったらしく、家までついてくる事はなくなったが休み時間などは変わらず構ってくる。ちなみに昨日の噂は日向自ら皆に事情を説明し妙な噂は一日で無くなった。

俺はというと生活習慣が昼夜逆転して起きるのは昼過ぎか夕方、学校には週に一回行くか行かないか程度になっていた。

そうこうしている間に早くも春休みを迎えようとしていた。

これは春休み前夜の出来事だった。今でも忘れない、あの時の大河原はどことなく吹っ切れた感じだったのを覚えている。

「明日はついに春休みだな。一年なんて早いもんだ」

「そうだな」

大河原と俺はいつぞやの河川敷で辺りは真っ暗になった午後六時、下校の途中で話し込んでいた。

「お前とは小学校から一緒だけど、またこの一年間で色々やったよな。夏休み闇プ（夜に学校のプールに忍び込み遊ぶ事）した時、バシて二人一緒に西山に全裸で説教食らったのも今思えば笑える。はっ」

「そうだな」

「……………」

「……………」

「大河原、さっきからそうだな、しか言ってねーぞ」

「そうだな」

なんだこいつ、道端に落ちてたもんでも食ったのか？

「……そういやさお前、二学期から連続で先生達と喧嘩してたろ？怪我した先生いたし、あれ大丈夫なのか？」

ほんとに空気を変えるつもり。

なんかギクシヤクした空気を嫌ったから軽く話題をだし大河原は笑ながら、あんなの大丈夫だったよ、とかいつもみたいに言うんだと思っていたが予想の反転、大河原はどこかビクついた様子になりました。

「ああ、あれな。鑑別所ギリギリだったつてよ。一ヶ月前に親同伴で校長室呼ばれてさ、春休みまで学校に遅刻、早退、欠席、授業はサボらないって条件で被害届は出さないってさ」

「なんだよ、深刻な顔して話すからお前がパクられると思ってびっくりしたぞ。でも学校ずつと行ってるし大丈夫じゃん」

ああ悪い、なんて魂が抜けたみたいに言う大河原だった。

まあ無理もない。今は条件は守ってるが、一度でもやぶれば速攻パクられる。

気が気でないのは当然の心理だ。

でも、一ヶ月前から学校に毎日通っていたのは知っている。

俺が学校に行かなくても大河原は学校に行き、俺が授業サボるの誘っても強く拒否して授業に出ていた。その時は事情を知らない俺は怪訝に思ったけど今なら褒めてやりたいくらいだ。

しかもその条件も明日で帳消しだ。明日昼まで、それまで頑張ればいつも通りの大河原になる。

終了式が終わったら学校の上にある商店街で大河原の好きなハムカツ買ってやろう。

「なんで俺に言わなかったのかはわからんが、俺はお前を見直したよ。ほんと何に見直したかわからんが」

「俺も本当の事言ってすっきりしたよ、ありがとな。俺らいつまでも親友だからな」

不意の言葉につい焦ってしまった。

心ん中では思っていて、いつも一緒にいて、それなりに不器用な俺達は決して言葉には出さなかった。

その言葉を真っ直ぐ素直に言ったのだ。

照れ臭そうな大河原と恥ずかしくて真面に顔が見れなかったが俺も恥ずかしい気持ちを堪えて大河原と向き合い、お互いの拳をゴチンと合わせた。

次の日、終了式の朝。

大河原が今日は条件最後の日という事で朝早くに登校して先生達にどや顔してやると張り切っていたので俺も便乗して早く登校している最中だった。

差出人：大河原のバカ

件名：今日ハムカツよろしく

本文

おはよう！

俺は先に行ってるぜ！早くあの腐れ先公共の悔しがる顔を拝みたいからな。

ヒロも早く来いよ！

あのバカもう学校行ってるのか、まだ七時だぞ。

しかし、もたもたしていたら西山の悔しがる顔見れないもんな。

まだ真冬と思わせる程に寒い朝の道をメールを見てからチャリを必死にこぎたした。

学校は自転車通学禁止だが俺と大河原はチャリ通していて、いつも俺達がチャリを止めている先生達にバレない秘密の駐輪場に止めている。そこにはすでに大河原のチャリが置かれていた。

俺も大河原のチャリの横に置いて少し小走りで学校手前の坂を登った。

学校には生徒会の者と思われる生徒がせつせと終了式の準備をしている他、朝練の生徒など一般生徒は誰一人いなかった。

「本当に早く来すぎただろ」

チャリをこいで温める事も出来なかった手を吐き出せば白く変わる息で手を擦りながら温める。

まずは靴箱へ行き上靴へ履き替え冷え切った廊下を自分の教室へと歩きだした。

（つと、あいつに電話しないとな）

ブルブル、ただいま電話に出る事が出来ません、と無機質な声が返ってくる。

？とは思ったが別段気にすることでもない、きっと教室にいるんだろう。

でも直感というか嫌な予感がし、少し急ぎ気味で教室へ向かった。

教室へ着く頃には小走りになっていて走りながら扉に手をかけ飛び込むように入り込んだ。

まだ時刻はAM07:30。

まだ生徒は登校して来る時間にしては早すぎる時間で誰もいないのでカラツと乾いた教室が独特の臭いがする。

あと三十分もすれば騒がしくなるであろう朝の教室は新鮮で、そこには誰もいなかった。

俺は何故か胸騒ぎがしていて校内を走りながら探したが大河原の姿は無かった。

いやっ実は大河原の悪い冗談だろ。

俺が必死に探している姿を陰で見えて、後で笑ながら出てくるに違いない。そんな事を頭の片隅で考えながらも俺は必死に大河原を探していた。

時刻はAM07:50。そろそろ学校に一般生徒が登校してくる時間帯だ。

一般生徒で混雑する前に生徒会の奴に大河原を見なかったか聞いておいた。が、

「確かに登校して来たのは見ました。でも、私達なにも見ていません……ほつ、本当です！」

生徒会の生徒は俺が近づいてくるなりビクビクしだして、話しかけても真面に目を合わせる事はなかった。

「あー……いきなり話しかけて悪かったな、じゃあな」

「あつ、あの……」

「なに？」

「……いえ、なんでもありません」

生徒会の生徒は何か言いたそうな感じだったが言葉を飲み込むように口を紡いだ。

大河原の行方不明といい、この生徒の妙な態度といい、俺は嫌な予感しか無かった。

普通に考えれば登校してすぐに指導室に連行されたという可能性もあるが何か違う。しかし、条件を守っていた大河原がパクられる訳がないし、条件を守り抜かれて慌てて被害届を出されても昨日、今日で警察が来て逮捕なんて事はまずない。

被害届まで出すなら事件なら日にちはかかる。

パクられる事は無いとはわかってているが脳に誰かが、探さないとヤバイ、などと訴えてくるのだ。

結局、大河原は終了式に大河原は現れなかった。

電話は何度かけるが、無機質な声が響くだけ。

放課後、指導室にいる可能性を信じて渡り廊下でぼーっとグラウンドを見ながら大河原の帰りを待っていた。

それからどれだけ時間がたったかは覚えていない。少なくとも三時間とはたったろつ。

「帰ろつか……」

これ以上は待ちぼうけしても意味が無いとはわかっていた。

さすがにこれだけ待って出てこないって事は指導室にはいないし、大河原も実は帰っているかもしれない。

そう思い、校門を出てとぼとぼと自分の自転車まで歩きだした。駐輪場にはまだ大河原の自転車がたった。帰ってないのか？するとまだ指導室に？

すると不意に後ろから声をかけられた。

「ふーん、私の前でチャリ通とは良い度胸ね」

振り返ると獣が餌を見つけた様に目を光らせた日向がいた。

「わりー、お前に構ってられるほど今は余裕ねー」

無気力化した脳と身体で、よっこらせと自転車にまたがり帰ろうとした。

「あらそう、なら大河原がどこにあるか聞きたくないんだ」

日向の言葉で腐った脳に電気が走ったような感覚で振り返った。

なに？大河原の居場所を知ってんのかこいつは。あれほど探したが学校では見つからなかったのに、何故こいつは知っている。

「いい？今から喋る事は全て私がうっかり声を出しながら喋った独り言」

「いいから教えろ」

自転車をその場に止めて、ずずいっと日向に詰め寄る。

「ちょ、ちよつと近いわよ！離れて。私だって生徒会の立場があるのよ。この事は口止めされてるし、あくまで独り言！いい？独り言なんだから！」

何故か赤面した日向は口止め、とか独り言とか強調しながら意味のわからない事を言っている。

「こほんっ、では独り言。私が今日、生徒会で朝早く学校に行って終了式の準備をしていたの。そしたら大河原君が朝早く登校するところを見かけた。登校して来た大河原に西山先生達が集まってなにやら揉め事を始めたの。最初は大河原君が、条件は守った、とか色々言ってたと思ったらだんだん大河原君が怒鳴りだして、それを見計らったかのように警察が何人も来て手錠をされてパトカーに乗

つていった…つてあんた何処に行くのよ！」

俺は話の途中で頭が真っ白になった。

警察？手錠？それに見計らったように来たって？それはもう大河原は……

考えるよりも先に体が動いていた。自転車はそのまま放置し、学校へと走り出した。

昼には終わった学校には生徒の姿は少なく、校門まで着いた俺は力を緩めることなく全力で校舎へと駆け込んでいった。

考えて無い体と脳でも目的地は一つであるのはわかっていた。階段を全力で三段飛ばしで駆け上がり、廊下を走った。

一つの扉の前で立ち止まり俺は憎いとはかりに拳を握りしめて扉を思いっきり開いた。

そこには、こちらの気持ちも知らずにのうのうとお茶をすする校長先生がいた。

「なっ、なんだね君は。ノックぐらいせんか！」

俺はその光景を見てもう収まりが付かないほど…キレた。

「てめー騙したな。大河原を騙したな！！殺してやるからそこ動くなよボケ！」

俺はソファや机をお構いなしに校長へと飛びかかり、騒ぎに気づいた教師達は校長室に駆けつけて来た。

「校長どうしました？つて月野なにしてる！校長先生から離れる！」俺の拳が校長に当たる寸前で西山を始めとした男の教師達に取り押さえられた。

「この野郎、殺してやる！殺してやる！」

もう校長室は嵐が起きたかの様にめちゃくちゃになっていた。

メダルやトロフィの飾れたガラス棚は割れて、花瓶や高価な壺なども粉々になっている。

俺はそれでも怒りが消える事はない。

「お前ら全員裏切ったな！条件を守っていたのに始めから裏切ってたんだな？離せ！触るな！汚れる！大人なんて大っ嫌いなんだ！だ

から殺してやる！」

自分でも何を言いたいのかわからない。

それでも抵抗して、この汚れた大人達を倒してやらなければならな
いとバカな頭がそう言っていた。

時刻は午後七時過ぎ。

俺はあの後、ずっと説教を食らっていた。

幸いな事にあれだけの騒ぎで説教で済んでよかった。

いや、何を言っただ俺は。大河原はいない。それでも仇をとらず
に自分だけ助かりたいのか？俺も腐ってるな……

とぼとぼと駐輪場まで歩いて行くと街灯に照らされた俺と大河原の
自転車が仲良く違法駐車禁止と貼り紙されてポツリと俺の帰りを待
っていた。

その時、俺は大河原が本当にいない事を実感した。

中学一年生、どれだけ大人ぶり容姿を背伸びしようがまだ精神的に
は幼さが残りっている。

そんな俺にはまだ現実を受け止めるにはまだ弱すぎたのかもしれない。
い。

街灯に照らされた自分の自転車と親友の自転車との三人で俺は涙を
流しながら家へと向かった。

「ヒロ、お姉ちゃんもう学校行くからね！」

今年の春から高校生になった姉貴は、いつも通り家族三人分の朝食と二人分の弁当を作って学校に早々と登校していった。

俺はというと、春休みずっと家に引きこもり中学二年生になった今でも続いている。

終了式の日、大河原は傷害事件で警察に逮捕された。

一年生の後半、終了式まで皆勤したら被害届は出さないという条件を守ったにも関わらず校長は最初からそんな気さらさらなかったようだった。

教師達…いや、大人達は裏切った。

俺は心底憎いと思ったし、仕返ししてやるとも思った。

だが行動には移さない。移せなかった。

腐っていく自分と生活に嫌気がさしている。

もう何もしたくない。そうして布団で蹲る生活が続いていた。

そんなある日の今にも雨が降り出しそうな晩。

その日も学校を休み家でダラダラしていると煙草が切れてしまいコンビニまで買い出しに行っている途中、夜の公園では似付かない騒がしい声が聞こえてくる。

「あの…やめて下さい…」

「大人しく着いて来いコラ！」

そこには見るからに頭の悪そうな男が数人で女の子を取り囲んでいた。

女の子は今にも泣きそうな顔でオドオドしている。

（まっ俺には関係ねーけど）

などと薄情な事を考える。

そうだ、俺はヒーローではない。友達一人救えない臆病者だ。

絡まれたらめんどくさいのは目に見えるのでスルーする事にした。

が、なんとも胸に引つかかる。

俺は公園を少し通り過ぎた所で立ち止まった。

何故か頭の隅で俺が日向に対してやった愚行を思い出す。
それとある言葉を思い出した。

『ヒロ、男は絶対に女の子を泣かしたら駄目だ』

なんで今頃出てくる。

やめてくれ。

そんな事はわかってる。

あんたにだけは言われたくない。

だから俺が守るんだってな。

ちっ、なんなんだよ。勘弁してくれ。

「あんたら、その辺でやめといたらどうすか？」

気が付くと止めに入った自分がいた。

女の子は涙目で俺を見てきょんとしている。

きっと相手の男は高校生だし体格はやはり差がありすぎる。

相手の人数は五人でどう考えても乱入する奴はバカな奴だ。あつ、

そうか…俺ってバカなんだ…

「なんだてめえ！中坊はさっさと帰れボケが！」

相手の一人が俺に対して罵声を浴びせてきた。

カチンときたのをとりあえずは心を落ち着かせ……ませんでした。

とりあえず一番前にいた相手の股間を全力で蹴り上げた。先手必勝！

「ぐあ！玉が！球が！魂が！」

そのまま一人はぐったりして起き上がる事はなかった。あれ…やり過ぎたかな？

が、気にする事はない。

男ならあの痛みがわかるぶん同情するが今はそんな事言ってる場合じゃない。

だから股間を蹴ったのだし、喧嘩のゴングを鳴らしたのは紛れも無く先手を打った俺だ。

一人は股間の鐘が鳴り響き戦闘不能で後は四人だが、やっぱり現実には厳しい。

四人相手は十分も持たずに俺はタコ殴りにあつた。当然だ。正直、四人は無理つす。

俺との喧嘩で気が晴れたのか、また今度来るからな、なんて言つて男達は女の子には手を出さず帰つて行つた。もう来ないで欲しい。

「あの…大丈夫ですか？」

いつの間にか俺の横にしゃがみ込んだ女の子はボロ雑巾の様になつた俺を心配そうに見ながら言つた。

「ああ、慣れてるからな。大丈夫」

ただでさえ喧嘩に負けてかつこ悪いのだから、せめて彼女を心配させない様に答えた。

今にも降り出しそうな曇のせいで夜の暗闇が濃くなっているのか、はたまた殴られた顔が腫れてしまつて上手く瞼を開けられないせいのか、彼女の顔はよく見えないが同じ学校の制服を着ている事には気が付いた。

しかしまあ、何故に俺は喧嘩の後に同じ学校の女の子と遭遇してしまふのかな。

プロフィールで、俺は喧嘩に負けた後に同じ学校の女の子と遭遇する体質です、つて付け加えるか……かつこ悪つ。

「あの…鼻血出てます」

蚊の鳴くような声で彼女は自分のブレザーから取り出したハンカチで優しく顔を拭いてくれた。

「いやっ、いいよ。ハンカチ汚れるから」

照れ臭くなり顔を背けて拒否するが彼女もか細い声で抗議した。

「でもお礼がしたいんです…あの…迷惑じゃ無ければ…その…」
だんだんと小さくなる声。

自分で言つた声にビクついているのか話す度に縮こまる彼女を見た

ら無性に落ち着いていられる。

普段ならお前マジ鬱陶しい、などと言ってしまいたくなる態度が今の俺には心地良いのだ。

「だったら名前くらい教えろよ。それがお礼でいいからさ」

そう言うとな彼女は泣きそうな顔から優しく顔を綻ばせた。

今にも降り出しそうだった雲はいつの間にか無くなって、月明かりが俺と彼女をスポットライトの様に照らし合わせた。

月明かりに照らされた彼女はあまりにも綺麗で言葉がでなかった。肩まで伸びた絹の様な綺麗な髪は夜の風に遊ばれながら舞っていて、今にも泣きそうな瞳は綺麗な満月を連想させた幼い顔で気の弱そうな可憐な美少女だった。

そんな二人を祝う様に照明係の月と、花弁を風吹かせる桜は最高の出会いのシチュエーションだった。

「私は平田菜月です…」

「…お、おう……」

それしか言葉がでないのだ。

例えば、急に幽霊とか現れるとキヤーキヤーとか実際は言えない。

ほんとは、ひっ！って感じ。今はそんな感じだ。

要するにいきなり美少女が目の前に現れてビビっているのだ。

「あの…あなたの名前は？」

「お、おう。俺は月野だ。月野浩美」

「月野さん……月野さん、ありがとうございました。あつ、でもお礼が名前なら私がまた月野さんの名前を聞いたからまたお礼をしないとイケない訳で……って、あれ？…よくわからなくなりました…」

なんだこいつ…ボケてんのか？意味がわからん事を言った平田菜月をアホだと気付いたのが幸이었다。

休み無しにバクバクいつていた心臓がやっと落ち着き、いつまでも地面にへたり込んでいたのでそろそろ起き上がりたい。

「なあ、そろそろ起きていいか？ケツ痛いんだけど」

「あつ！すいません。私すっかりしてました。どうぞ」

俺がうんざりした顔をしていれのに気が付いたのか、咄嗟に手を差し伸べてきた。

が、その手を借りず自力で立ち上がる。

「おっと！」

「だ、大丈夫ですか？」

タコ殴りにあつた為、やっぱり足はフラフラだ。

でも高校生四人相手だったんだ。逆にこれくらいで済めば僥倖だ。

「一々、オドオドすんな。大丈夫だから」

いや、実際大丈夫じゃないけどね。

「はい…すいません…」

彼女は目に見えるほど表情がしばらくのを見て少し罪悪感を感じる。あー、なんて言うか…このタイプ苦手だ。

「じゃあ俺用事あるから、じゃあな」

美少女の目の前で喧嘩に負けてボコボコの不細工面になってオマケに鼻血ブーは流石に精神的にキツかったので早々と退散したかった。去り際にぐらいカッコつけてもいいだろ、なんて思ってた背中二本指をピツとあげてガクガクの足で去って行こうとした最中、不意に彼女に呼び止められた。

「月野さん！やっぱりちゃんとお礼がしたいです。私の家に来ませんか？」

「…は？」

それは月野浩美と平田菜月の長い長い中学二年の始まりだった。

「ヒロ、すまん…すまん…すまなかった…許してくれ」

小学校五年生から六年生へなる春休みのある日の事だった。

その日はバケツをひっくり返した様な雨で、小さなカフェで男は小さく震わせた大きな手で俺の小さな手を握り締めて謝っていた。

やめてくれ。

なんで今更謝ってくるんだよ。

俺はあんたに懂れていたんだ。

そんな惨めな姿を見せないでくれ。

ただ俺はその光景を呆然と見ていた。

俺は雨が好きだった。

雨音が全てを遮断してくれる。

雨水が全て洗い流してくれる。

傘なんていらない。

俺を打つ雨が全てを消してくれる。

そんな雨が好きだった。

その日は悪い夢を見た。

目が覚めると眩しい日差しが忌々しくも俺の目に飛び込む。

日差しが丁度落ちてくるピンポイントに枕を置くのは人間の特殊能力ではないだろうか、などと考えていると、か細い声で誰かが話しかけてくる。

「月野さん、起きて下さい。朝ご飯食べましょう」

それは昨夜、集団の男達から助けた同じ学校の制服にエプロン姿の美少女——平田菜月だった。

「ああ、今起きるからちよつと待ってくれ」

俺は湿気臭い畳にひかれた布団からよっこらせ、と起き上がる。しかし、極自然にこの状況に対応している俺は実はこの状況がよくわからない。

なので、もう一度よく考えてみる事にした。

昨夜、俺は集団の男から暴力を受ける彼女を助けた（ほんと身代わりになっただけ）。

そして、彼女はお礼がしたい、と申し出て彼女の家に招待された。

彼女は１Ｋのボロアパートに一人暮らしで両親はいないらしい。

そして、ご飯をご馳走してもらったところから記憶は無い。

「月野さん、昨日は相当疲れてたんですね。ご飯食べた後すぐに倒れた様に寝ちゃって」

なんだ…あの後すぐ寝たのか。

という事は俺はご飯を食べさしてもらって彼女の家に泊まったのか。

「いや、悪かったな。せつかくご飯もらったのに」

「いえ、いいんです。私がお礼がたくて無理矢理やった事ですし…それより朝ご飯できてます。食べましょう」

彼女はにつこり笑いキッチンの方へ向かって行った。

「ああ、そうだな。俺も腹ペコだ…ってちよつと待て！おかしいぞ、この状況！」

「おかしい、って何がです？」

彼女はキッチンから持ってきた食事を持ちながら、きょとんとした顔で首を傾げた。

いや、待て待て待て待てくれ。だって一人暮らしの同級生の女の子の家にお泊り…やっべー、やべーよ。何がやばいって、とにかくやばい。

喧嘩で朦朧とした意識で俺はたぶんここへ来てしまったに違いない。そうだ、これは不可抗力なんだ。

それより、まだ『女の子の家に遊びに行く』っていう男子中学生ならではのワクワクドキドキした心の準備とかしてなかったのに……

うつつ、俺の初体験返せ……

「月野さん、すごい汗かいてます。もしかして熱があるんじゃない？」
彼女はずいっと心配そうな顔を近づけ、額に手を当ててくる。

「どわぁ！ 寄るな、寄るんじゃないねー！ そ、それより朝飯食おう！ そ
うだな、うん」

恥ずかしいのと今にも相手に気付かれそうな勢いで跳ね回る心臓を
誤魔化す為、必死だった。 なにこれ…… こんなシチュエーション俺
じゃない。

「そうですね、ご飯冷めてしまいますからね」

俺はほっと胸を撫で下ろし、ご飯が並べてある机の前に座る彼女と
対面側にどっかり座った。

「いただきます」

彼女は行儀良く一礼し、お箸を器用に使いご飯を食べ始めた。

しかし、相手が美人の分こんな光景はすごく新鮮だった。

まるで新婚夫婦のような…… っていかんいかん、落ち着けヒ口。 お
前はバカだ、考えるな。

俺も気恥ずかしさを覚えながら彼女の作った料理を口へ運ぶ。

「あ、これ…… めっちゃマズっ！」

そうして俺はこの気恥ずかしいような新婚生活の様で甘酸っぱいよ
うな、なんとも言えない強烈な朝食によってブラックアウトされて
幕を閉じた。

しばらくすると、カチャカチャと食器同士が当たり奏でる音で目を
覚ました。

どうやら彼女の強烈にマズい料理で気絶していたらしい。

昨日も寝たんじゃなくて気絶なんじゃないのか？

「あつ、起きました？ 食べてまたすぐに寝ちゃったからびっくりし
ました。牛さんになっちゃいますよ？」

「起きました？ じゃねーよ。危うく死ぬところだったぞ」

「どういう事です？」

なに？気付いてないのか？あれは並大抵の者じゃあっさり死んでしまうほどのマズい味だ。こいつ味覚がおかしいんじゃないの？

「それより、そろそろ登校する時間ですよ。用意して下さい」

「いや、俺制服ないから行けねーよ」

しかも学校なんて随分休んでる。どんな顔して登校しろというのだ。

「それなら心配ありません。兄が以前使っていた制服があります」

「いや、俺は……まあ、いいか」

そもそも学校では浮いてたし、長期の欠席でも今更何も変わってない。

せいぜいまたあの不良サボってる、くらいしか思われてないだろうし。

「じゃあわりーけど借りるぞ」

「はい、どうぞ」

俺が制服を受け取ると何が嬉しいんだか平田は笑顔になった。

でも、なんだか彼女と一緒にいると心は落ち着いた。

彼女の控え目な澄んだ声、優しい月のような瞳。

それは俺の淀んだ心を雨の様に洗い流してくれるようだった……

久しぶりな朝の登校。

いつもは夜しか外に出ない俺は久しぶりの夜とはまた別の澄んだ空気に新鮮な気持ちだった。

「それよりさ、お前何年なの？」

「あつ、私ですか？私は中学三年生ですよ。月野さんは？」

「年上かよ…俺は中学二年」

あまりにオドオドして敬語で喋るもんだから、完全に年下と想っていた。

「それより兄の制服がぴったりで助かりました」

「ああ、まあな。俺って人より肩幅あるから良かったよ」

そんな些細な話をし一緒に並び、時々肩と肩が優しく触れ合いながら登校する。

それがなんとも心を撫り心地良い。

大河原が捕まった日からこんなに心地良いと思えた時はなかった。

俺達は桜の並木道に差し掛かると、さっきまでニコニコしていた彼女は目を大きくして立ち止まった。

「ん？どうした？」

彼女が見ている先を見ると、昨日彼女へ暴力していたグループのうちの一人と見るからに極道を歩んでいるであろう三十代くらいの男がいた。

「お嬢ちゃんやっと思つけたよ。早くこっちに来なさい、もう痛い事しないから」

平田は首を横に振りながら怯えた様子で震えていた。

バカな俺でも只事ではないと直感する。

「おい、ちょっと待ておっさん。この子怖がつてるからやめてくれないか？」

俺は彼女とおっさんの間に立ち、おっさんの前まで歩み寄る。

「やめて、月野さん！」

初めて出した彼女の強い口調だった。

思わず振り返った俺の両肩を急におっさんは持ち、そのまま引き寄せる感じで膝蹴りを俺の腹へ叩き込んだ。

「中坊の不良気取りは大人しくしてりゃいいんだクソ」

倒れかかった俺の顔面を硬い革靴で蹴り上げた。

口の中は切れて血の味がする。

鼻血もダラダラ出てきて息苦しい。

宙に舞ってる赤いやつは俺の鼻血か？口から出た血かな？とスローモーションに見える風景を冷静に考えながら見ていた。

ずしゅと音を立てながら俺は冷たいアスファルトに倒れた。

「おい、亮平。そのガキの相手してろ」

「は、はいっ！」

もう一人の男が俺へ歩み寄り腹部を更に蹴られて自分は血を吐いて
るのか今日の朝食が出ているのかさえわからない。

「やめて下さい！お願いです、私なら着いて行きます。だから、月
野さんには手を出さないで！」

朦朧とする意識の中で彼女の声が聞こえた。

ああ、あんな怒鳴って。どんな顔してんのかな……怒ってんのかな
？泣いてんのかな？

「お嬢ちゃんやっとなつてくれたんだ。おじさんもね、あんまり
暴力好きじゃないんだよね。でもおじさんの怖い上司から頼まれた
大事な仕事だから仕方なくやってるだけ。お嬢ちゃんが抵抗しない
なら暴力しないから」

彼女は死んだ目をしながら、こつくと頷いた。

あんなにも綺麗だった瞳は涙を流して光は消えていた。

それが許せなかった。

どうしていつもも大人は俺達の幸せを取り上げる。

いつも、いつも、いつも、いつも、幸せを奪うのは大人だ。

自分勝手な大人、周りを置き去りにする大人、弱い大人にはうんざ
りだ。

そんなに腹が立ったのかアドレナリンがぐんぐん分泌する。

痛みなんてわからない。

ただ俺は今なにをするべきかはわかった。

顔を蹴ろうとした男の脚を必死にしがみ付き、バランスを崩した
男は尻から倒れ込んだ。

それを見逃す訳にはいかない。

ヨロヨロ立ち上がり渾身の一撃を男の顔面に蹴り入れた。

前歯は折れて鼻血がドクドク出ている。

気絶したのか起き上がる事はなかった。

そして、強引に彼女の腕を引っ張る男目掛けて走り、思いつきり体
当たりした。

彼女も巻き込んだが仕方ない。

男は不意打ちで体当たりされ派手に地面に倒れ込む。

俺は男の上に乗りに近くにあった石を握り締めて男の顔を何度も殴った。

何度も叫んびながら、何度も何度も殴った。

口が血だらけで呂律が回っているのか自分でもわからない。

ただ俺は怒りを吐き捨て叫んでいた。

たぶん男は気絶してるんだろう。

だが殴り足りない。まだ殴らないと気が済まない。

「月野くん！そこで何してるの！やめなさい！」

聞き覚えのある声だった。今は周りの音や風景などわからない。頭と目には男しか写ってないのだから。

「柊先生！月野さんが、月野さんが！助けて」

泣きながら助けを求める平田の声がした。何言ってるんだ、今俺が助けてるじゃないか。

視界がボヤけて周りの雑音も籠った様に聞こえる。

そこで俺の意識は暗闇へと沈んでいった。

次に目が覚めると保健室のベッドの上だった。

自分の身体がベットに根を貼った様に重い。

ベットからベリベリ体を剥がす様に動かすと骨が軋む様に痛い。

痛みを我慢しながらベッドから上半身だけ起き上がり時計を見ると
12:15と指していた。

「昼休みか…」

あの後どうなったんだろう、彼女は無事なんだろうか、と不安に駆られる。

そしたらすぐにでも彼女の元へと行かなくちゃ気が済まなくなった。
急いでベッドから降りようとすると身体がまだ動くんじゃねえ、と
でも言う様にピキピキと身体が悲鳴を上げて盛大にベッドから転が
り落ちた。情けない事この上ない…

「情けない事この上ないわね」

保健室に自分一人だと思っていた俺は不意に声を掛けられ、ふと顔を
上げると俺を哀れむ目で見下しながら言う相手——それは俺に
とって久しぶりに来た学校で一番会いたくない人物がいた。

「終了式ぶりかしらね」

「げっ…日向かよ」

日向翔子だ。

彼女と俺は犬猿の仲である。

なんでも成績優秀、スポーツ抜群、おまけに誰もが見惚れるほどの
美少女の学年委員長である彼女に入学早々目を付けられ、馬が合う
筈も無いいつもいがみ合うばかりだった。

ただ一方的に不良から更生させてやるから黙ってついて来い、など
と美少女のくせに男前な事いいやがるもんだから反発したくもなる
もんだ。

「げっ、とは失礼ね。喧嘩売ってんの？」

「いや、反射的に言っただけだ。気にするな」

「尚更悪いわよ！更生させるのと一緒に女の子に対してのマナーも教える必要があるよね」

「ぷっ、お前に教わる事なんてねーよ」

「ぱっこーん！保健室に軽快な音が響き渡った。」

日向の渾身のツッコミは上履きで俺の脳天から身体の真芯を捉えて喧嘩した後の痛みを再度呼び起こした。

「何すんだバカ！」

「バカはそっちよバカ！あんた、また喧嘩したんでしょ！？」

言葉が息詰まる。こいつ、知ってたのか…

今回の件は警察沙汰にも成り得る喧嘩だった。

その後、誰がどうやって助けてくれたのかはわからないが、こいつが知っている以上、学校も知っているはずだ。

しかもこいつに知られとなれば、それを盾に脅迫してづけつけと追い討ちを掛けてくる。その展開は想像しただけで恐ろしい。

冷や汗を垂らしどう言い訳しようか考えていると日向は呆れた様な顔をして言った。

「どうして知ってたんだって顔してるわよ。あんた顔に出過ぎ…体を見たらわかるわよ。事情は知らないけど、でもそれは仕方ない喧嘩だったんじゃない？バカはバカだけど、バカなりの戦いをしたんじゃないの？そう顔に書いてあるわよ」

その言葉に胸を刺された。

彼女の呆れ顔はいつもとは別の優しいものだった。

俺は不覚にも胸を握り締められた様な錯覚を覚えてしまった。

「今回は見逃してあげるからベッドに戻りなさい。手、貸してあげるから」

「あ、ああ…」

日向が手を差し出した。

俺は照れ臭くなり、なんとか誤魔化そうと俯きながら立ち上がる。

しかし、日向は今回の喧嘩の騒ぎを知らなかったのか。

日向が知らないなら学校にバレてる可能性も減ったな、と安心して
いるとピンポンパンポーンと放送が鳴り始めた。

『あー、二年D組月野浩美君。職員室まで来て下さい』

……あ、バレてた。

俺は生徒指導室に、我が担任である女性教師の柊先生と机越しで睨
み合っていた。

柊先生は一年生の時も担任だった。

同じ年か高校生だと言われても気付かないほど幼い顔の柊先生は授
業中ワイワイガヤガヤ騒いでも気の抜けた声で皆さん静かにー、な
どと甘く怒るもんだから生徒も調子に乗って先生をからかう事もある。

そんな光景を見て俺は心底下らないなど考えて授業を出て行きサボ
っていた。

いつも下らない授業をサボり、好き勝手悪さしていた俺は柊先生に
何度も何度も怒られていた。

学校を春休みからずっと休んでいたのも二年生になった今でも毎日
電話がかかってくる。

しかし、二年生になってからは今日初めて会うのだ。

そして久しぶりの再会がこんな重い空気で出会ってしまつて柊先生
もさぞかし苦しいだろう。

「月野くん、今日あつた事は学校にはまだ言つてないわ」

最初に口を開いた柊先生から出た言葉に思わずびっくりした。

じゃあ何故俺はここにいるんだ、と質問したいが黙って聞く事にし
た。

「月野くんを止めたのは先生よ。あなたが男の人に血だらけで跨が
つて殴っていたの。あのまま続けていたらあの人確実に死んでたわ」
そんなの自分でもわかっていた。

このまま殴り続けるとこいつ死んじゃうんじゃないかな、って。
でも殴り続けないと気が済まなかった。

怒りが、憎しみが、止める事をやめなかった。

「あなたを止めた後すぐに月野くんも気絶して隣に居た女の子と一緒に車で学校まで運んだのよ。事件現場から自分の生徒を逃がす様な事して教師としてバカな事をしたわ。でもね、先生は後悔してない。月野くんは警察のお世話にならなくても大丈夫。きっと良い子だって信じてるから」

「余計なお世話だ……」

本当にそう思った事が口から出た。

きっと柊先生は自分の教師としてのプライドを捨てて俺の為に正しい道を行けるようにしたんだと思う。

だけど俺にはそれが余計に癢に触った。

教師だって人間だ。

きっと普通の人間なら今俺を殴るところだろう。

誰だってそうする。

俺だって今殴られても反発する気はなかった。

「月野くん……今日の事は見なかった事にしておくわ。でも辛い時は先生に頼ってね。先生はあなたの味方よ」

柊先生は辛そうな顔で、でも俺には弱いところを見せないように優しい顔で言った。

「何が味方だ！」

しかし俺は反射的に机を手でバンと叩いて立ち上がり叫んでいた。
勢い良く立ち上がりパイプ椅子はガシャンと後ろに転げている。

「じゃあなんで大河原を見捨てた……あんたも教師なら知ってたんだろ？ だったら何で助けなかった。あんたも大河原を裏切ったくせに綺麗事ばっか言ってるじゃねーよ！」

柊先生はそのまま押し黙ったままだった。

プライドを捨てて助けた生徒に罵倒を吐かれて気が病んだのだろうか。

俺はそのまま生徒指導室を後にした。

俺はそのまま帰宅した。

帰ってくるなり投げやりな感じでベッドに突っ伏して寝てしまった。寝ると嫌な夢を見てしまうから寝るのは嫌いだった。

だけど、明るい時間は更に自分の居場所を追い詰める。

だから夜が好きだった。

暗い時間は汚ないモノを隠してくれる。

だから、せめて夜になるまで嫌な夢を見ないように祈りながら眠ろうと思った。

目を覚ました頃には部屋もうすっかり暗くなり、携帯を開くと眩しいディスプレイを絞った目でようやく21:30と読み取る事が出来た。

仏頂面で目を擦りながらぼーっと時間が過ぎていくのを待っている。するとパチンつと音がして部屋の電気が点いた。

「あんた、昨日どこだったのよ」

地元の高校の制服にエプロンを来た姉貴が立っていた。

「まぶしっ！電気点けんなバカ！」

「はいはい、これだから中学生わ。何でも反抗したがるんだから」
姉貴はやれやれといった感じで肩を竦ませる。

「ご飯出来たから来なさい」

昨日の無断外泊については追求してくる事はなかった。
それが両親がいない俺達の母親替わりである姉貴の教育方針なのだろうか。

渋々と下に降りて姉貴とキッチンに向かう。
食卓テーブルには既に妹の優が待っていた。

「兄貴、遅い！ご飯冷めちゃったじゃん」

こいつ、うぜー。

妹は今は小学校六年生だ。

来年は俺と一緒に中学生に上がってくる。

昔はお兄ちゃん、お兄ちゃん、と可愛かったのに今じゃ生意気なクソガキだ。

いただきます、と三人礼をしてから力チャ力チャと食器の音しか聞こえない。

うちの食事は行儀にうるさかった。

食事中は必要以上に喋らないしテレビもつけない。

それが我が家の教育方針だ。

「ちよつと兄貴、醤油とつてよ」

妹の優が口を開いた。

もちろん俺は無言で醤油を妹から一番遠い場所へ置く。

「ぐぬぬ…」

食事中に騒がしくすると怒られてしまう手前、妹は怒りを噛み締め呻いた。

それを見て俺は笑いを堪えて心の中でほくそ笑んでいた。

そこで姉貴は素知らぬ顔で醤油をひょいっと妹の近くに置いた。

すると妹の顔はぱあっと明るくなり俺にふんつと顔を反らして見せる。

俺はイライラしながら晩飯を掻き込んで早々に胃袋へ入れた。

「ご馳走様」

「あんた、今日もどっかいくの？」

姉貴は食事を中断して俺に問いかける。

「別に関係ないだろ」

素っ気無く言うそう、と言うだけで姉貴は食事を再開した。

別に姉貴や妹と話す事は無いしそそくさと部屋へ戻りベッドに横になった。

はあー、と息だれた後、ふと今朝言われた彼女の言葉を思い出した。

「食べてすぐに寝たら牛さんになっちゃいますよ」

（なにしてんのかな…あいつ）

学校では途中で早退してしまって会う事ができなかった。

あの後、彼女は無事だったのだろうか、と考える。

俺は心配しているんだろうか。

まだ会って間も無い女の子に気を使うのは自分ではあり得ない事だった。

「家…行ってみるか」

考えるよりも行動する。

それが自分なりの考えであり、むしろくしゃした気分を晴らす事が出来るんじゃないかと思った。

携帯とタバコを制服のポケットに入れて玄関に行くと、俺が出ていくのを予想していたように姉貴が立っていた。

「やつぱり出かけるんだ…」

「まあな」

俺はゴソゴソと靴を履きながら返事を返した。

時間はまだ十時過ぎで別に怒られてしまう訳でもないし、俺が深夜徘徊するのはいつもの事だ。

それでもその日は一際空気が重たく、まるで実家から旅立って行く息子の気分の様だった。

「なるべく早く帰ってきなさいよ。あんたの家はここなんだから」
姉貴はくるつと背を向けて言った。

その背中では行かないで、と言っているような気がした。

「ああ」

俺はそれだけ言うと逃げる様に家から飛び出した。

今朝の通学してきた道を思い出しながら歩く事三十分、住宅地の奥の奥にある彼女のボロアパートが静かに建っていた。

あいつの部屋は確か202号室だったな、と見ると灯りが点いていて安堵する。

そのままカンカンと階段を登り202号室の前で立ち止まりノックを鳴らそうとした。

が、なかなか扉を叩けない。

自分でもわかるくらい音でトクントクンと心臓が鼓動を上げて、ノックを鳴らそうとした握る手には汗が滲んでいた。

（緊張してんのかな…）

今朝まで何ともなく入っていた部屋に緊張してノックするのを躊躇している自分がよくわからなかった。

扉をノックして出てきた彼女に何て言おう。

やあ、こんばんは平田、か？俺のキャラじゃなーな。

よう、お前の事心配で見に来たぜ、か？爽やかすぎて引かれないか？そんな事をモヤモヤ考えて数分、あーもう、どうにでもなれ！とぶっくらぼくにゴンゴンとノックをする。ちなみにチャイムは壊れていた。

しばらくシーンとボロアパートは静まり俺は何故かほっと胸を撫で下ろした。俺、やっぱり緊張してたのか……

そろそろ帰ろうか、と思った矢先、ガチャと音がして扉は開き、その安心していた俺の心境はあっけなく裏切られた。

「はい、どちら様でしょうか？」

そこには昨日助けた美少女が変わらず立っていてくれた。

「連絡して頂いたら晩ご飯の用意をしましたのに」

「いや、晩ご飯は遠慮する。死にたくないしな…それより連絡先なんて知らねーよ」

俺の突然の思い付きで部屋へいきなり押し掛けたにも関わらず、彼女は俺を見るなり笑顔で迎え入れてもらった。

中に入れてもらった俺と平田は机越しで渋い緑茶を啜りながら談話している最中だ。

「連絡先を知らないのは不便ですよ。じゃあ携帯の番号教えて下さい」

「ああ、いいけど」

ポケットからひょいっと携帯を取り出し彼女を見ると軽い足取りでタンスへ駆けて行く。

「あれ？どこにいったんでしょか……」

タンスの引き出しをゴソゴソ漁っている。

あまり使う事が無いのかタンスの引き出しの奥へ入れてしまっていたのか携帯を搜索してから数分、やっと出てきた携帯をニコニコと俺に見せるようにして戻ってきた。何が嬉しいのやら……

見るからに何年か前に販売されていたであろう時代遅れの携帯が傷一つないところを見ると、買ってからずっとタンスに仕舞っていたのかと思う。

「携帯使わないのか？」

「はい、あまり使いません。友達ともあまり付き合いが無いので」
平田はおぼつかない手付きで携帯番号の交換もようやく終わり俺は今日の出来事を聞いてみる事にした。

「今日のあれ……なんだったんだ？知り合いみたいだったけど」

ストリートには聞けず少し濁した言い方で聞いてみた。それでも直球よりの聞き方なんで、あまり気分はよくない。

彼女は少し俯きなかなか言葉は出てこない。

俺も聞いた事に対し少々罪悪感に浸り始めた頃、彼女は顔を上げはにかみながら答えた。

「助けてもらってありがとうございます。ですが、これ以上言々と月野さんも引き返せなくなると思います。月野さん優しいですからその表情はあまりに気の毒だった。

辛いんだろう。助けて欲しいんだろう。

今ここで口にしたら楽になれる。だけど、俺の性格を知ってしまった彼女はそれを言う事が出来ない、なんて顔をしている。

そして俺もそれ以上追求出来なかった。

また俺は逃げてしまったのだ。

俺だってあんなヤクザ怖い。もう一度なんて会いたくない。

彼女の口から聞いたたら、俺はまたあいつらに会わなくてはいけないんだから。

ボロアパートの一部屋はシーンと静まり返った。

「ところで月野さん。今日はまたお泊まりになられるんですよね？」

「は？」

静まり返った空気で平田は不意に意味がわからん事を言った。

「だって月野さんも何かあってここに来たんですよね？家でなんかあったとか」

「そういう訳でもないんだが…まあ、あんまり家に居たくないのは同じか」

そうですか、と彼女も自分の事のように落ち込み。

「では、しばらくここに泊まられたらどうでしょう？」

「はい？」

いや、待て！なんでそうなる。

年頃の男女に不衛生極まりないだろ。

まず、こんな夜中にフラフラ来た昨日知り合ったばかりの見た感じチャラチャラした男を迷わず家に連れ込めのもよく考えたらおかしいし、あるうことが一人暮らし家してる女の子の部屋に泊まらせるだど？…… 幸せ過ぎじゃねーかクソ！

「お邪魔します！」

深々と頭を下げて言ってやった。

見たか、このバカな俺の姿を！

「それに月野さんが考えてるような心配事はありません」

「なんで？」

「月野さん優しいですから」

こいつ、実は小悪魔なんじゃね？

そんな事言われたら何がなんでも大人しくするしかないじゃないか
卑怯者！

期待は無いと言えば嘘だが、本命は平田が一人暮らしだから心配だった。

幸いにして通学路を待ち伏せしているあたり、ヤクザ達には家はバレていないだろう。

だが、いつバレるかわからない。

だからなるべく一緒にいてやろうと思いついたのだ。

自分から会いに行くのは嫌だけど、来られる分にはしょうがない、と諦めがつくし、何故だか彼女を放っておくのは俺には無理だった。

「しかし、殺風景な部屋だな。普段なにしてんだ？」

「ゴロゴロしてます」

まあ、大抵はそう答えるのがセオリーだけだな。

電話などで今なにしてんの？って聞くと暇だからゴロゴロしてるー、なんて答え以外聞いたことが無い。

しかし、こいつがゴロゴロしてるなんて想像つかねーな。

「お前がゴロゴロしてるなんて想像つかないから試しにゴロゴロしてくれ」

「今ですか？少し恥ずかしいんですが…わかりました。見てて下さい」

拳をグツと握り、決心した様子で承諾してくれた。

すると彼女は机を部屋から退かして彼女は部屋の隅で寝転がった。

「？」

意味がわからん。

ゴロゴロするって部屋でダラダラするって意味だろう。

「い、いきますよ月野さん！」

「お、おう」

少しドキドキしながら彼女を見た。

「いきます！ゴロゴローゴロゴローゴロゴロー」

彼女は部屋の隅から隅まで自分の体をゴロゴロ転がし始めた。

向こうの壁に到着すると、また転がり始める。

それを何度も何度もゴロゴロしていた。

「……なにしてんの？お前」

「え？でも月野さんがゴロゴロしろって」

俺が冷たい目で見ていると彼女は目を白黒させアワアワと赤面しながら慌てふためいた。

「確かに幼い頃に一度はするが、この年でやるかよ！そもそもゴロゴロするって部屋でダラダラ過ごすと言う意味で皆使ってるんだバカ」

「それは月野さん自身の常識です。私はゴロゴロと言ったらこのゴロゴロです！皆さんもきつとこのゴロゴロしてます」

電話で今なにしてんの？って聞くと暇だからゴロゴロしてるー、なんて言いながら部屋でゴロゴロ転がってるなんてシニール過ぎる。

「でも楽しいですよ？月野さんも一緒にどうですか？」

「やらん！」

ピシヤリと拒否してやると、しゅーんと落ち込む姿を見てやれやれと肩を竦めた。こいつ、アホだ……

それから胸ポケットから煙草を取り出し火を付けようとした。

「あっ」

あまりにもこの部屋に馴染み過ぎて自分の部屋だと思い煙草を吸おうとしてしまった。

流石に女の子の部屋で吸うのはマナー違反だろう、と思い慌てて火を付けるのを止めた。

「月野さんも煙草吸うんですね。ちょっと待ってて下さい」

彼女はトタトタとキッチンまで行き、台所の棚から灰皿を取り出してきた。

「お前、煙草吸うのか？」

「私は吸いませんよ。兄が吸っていたんで」

「兄貴か…前まで兄貴と一緒に住んでいたのか？」

「はい、以前は兄と二人暮らしでした……そんなことより着替えを取りに行かなくていいんですか？」

「ああ、確かに着替えはあるな」

これから何日か泊まるのであれば着替えは必要だ。他にも携帯の充電器など生活用品を持ってきたい。

流石に現代っ子してる俺には煙草とギターさえありやどこでも行けるぜ、なんて事は出来ない。

とりあえず着替えを持ってくる為、平田と一緒に自分の家へ行く事になった。

家についた時には時刻は00:30で日付けも変わっている。

もちろん我が家の灯りは消えて姉貴も妹も寝ているようだった。

音を立てずにそっと玄関を開けて自分の部屋で極力音がしないよう身支度した。

なんとも罪悪感とスリル感が混ざり合い、気分は泥棒のようでドキドキした。

手早く荷物をまとめて玄関で靴を履く時、姉貴の言葉を思い出した。

「あんたの家はここなんだから」

いや、自分で決めた事だし、やらないといけない事もある。

その言葉を振り払う様にさつさと家の外に出たら当たり前だが平田が待っていてくれた。

「家の人にご挨拶しましたか？」

「アホか！そんな言えるかバカ」

今日から一人暮らしの女の子の家に泊まりまーす、なんて言えたらそいつは世界一のバカだろう。

俺は車庫から自分のチャリを取り出してカゴに荷物を詰め込んで跨がり、荷台をポンポンと叩いた。

「乗れよ」

「え、ええ？私ですか？」

「こんな人通り少ない深夜の道端にお前以外いないだろ」

「でも私二人乗りした事ないし……」

かー！この手の女はマジで鬱陶しい。

「いいから乗れ！」

そう言つて強引に手を引つ張ると渋々といった感じで平田は荷台に
ちよこんと乗つかった。

無駄にベルをチリンチリンと鳴らし出発した。

初めての二人乗りで怖いのか腰を強く抱き締める平田と俺は何だか
夢の様な時間だった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7169x/>

この街の片隅で

2011年12月13日22時46分発行